

現代日本の『不思議の国のアリス』

—挿絵に見られる「かわいらしさ」をめぐって—

小坂田 摩由*

Alice's Adventures in Wonderland in Contemporary Japan:

The "kawaii" seen in the illustrations

Mayu OSAKADA

Abstract

This paper analyzes the publishing situation and illustrations of "Fushigi no kuni no Alice" a Japanese translation of *Alice's Adventures in Wonderland* by Lewis Carroll in English, and elucidates what Alice in contemporary Japan is. Originally, *Alice's Adventures in Wonderland* had illustrations written by John Tenniel. In modern Japan, however, various types of translations have been published, and new illustrations have been written down each time. Among them, the patterns that can be defined as "kawaii" tend to increase in recent years. Such "kawaii" Alice's clothes are separate from previous Alice's. Japanese children and adults had been long embodied the presence of Alice at the same place and age by updating Alice's costumes since the beginning of publication. However, Alice in recent Japan is not always dressed in the same costume of this age of Japanese girls. What Alice in Japan embodies is "kawaii", and the existence in the same place and same age with Japanese girl is becoming less important.

Keywords: *Alice's Adventures in Wonderland*, Children's Literature, Contemporary Japan, Kawaii, Illustration

1 はじめに

1.1 『不思議の国のアリス』と「かわいい」挿絵の出現

児童文学とはその名の通り児童の文学、すなわち子ども向けの本のことである。しかし子ども向けの本は、「子どもが読んでおもしろい」本と必ずしも同義であるとは言えない。今でこそ世に出る児童文学はみな「子どもが読んでおもしろい」ことが前提であり、本が読みたいと思っている子ども自身、あるいは我が子に本を読ませたいと考えている親が手に取りやすいように、様々な工夫が凝らされている。けれども児童文学というジャンルが成立した初めの頃、児童文学は教訓的な要素が重視される傾向にあり、「子どもが読んでおもしろい」かどうかということはあまり考慮されていなかった。それが廃され始めた最初

キーワード：不思議の国のアリス、児童文学、現代日本、かわいい、挿絵

* お茶の水女子大学大学院博士後期課程

期、現在の児童文学の歴史でも黎明期に出版されたのが、ルイス・キャロル作『不思議の国のアリス』（以下、本文中では『不思議の国』と略記）である¹。今から約 150 年前に生まれた、主人公アリスが奇想天外な冒険をするこの物語はまさに「子どもが読んでおもしろい」ものであり、日本でも名作として受け継がれている。

『不思議の国』の人気の大きな要因のひとつに、挿絵が挙げられる。この作品に限らず児童文学において挿絵は必要不可欠であり、白井は「いつの時代にも子どもは視覚と想像力を刺激する本の挿絵に魅了されてきた」（白井, 2013, p.212）と述べる。また川端は、挿絵入りの本について「文章が主で、子ども読者がイメージをもちやすくするために、説明や例示をする絵が入っている」（川端, 2013, p.17）と定義している。つまり挿絵とは、児童文学の中で大切な役割を担う存在である。挿絵は視覚情報である以上、物語の印象を大きく左右するがゆえに、作家もそれを意識して自作品に挿絵を添える。しかし現代日本では『不思議の国』のような海外児童文学の翻訳作品で、初めに作品が出版されたときと異なる絵をつけて新たに出版する現象が起きている。またこの現象の中で、現代の日本において「かわいい」という言葉を体現する存在としても知られているアリスは、日本のサブカルチャー・オタク文化と関連した特徴的な「かわいい」服装・絵柄で描かれることがある。

1.2 『不思議の国のアリス』先行研究と研究目的

『不思議の国』は世界で最も有名な児童文学のひとつであるがゆえに、日本に限っても先行研究は多い。特に英語から日本語への翻訳には独自の課題も多く、言語学的視点で多くの研究が行われている。

とはいえこの作品の魅力は文章だけでなく、画家と作家が共同して作り上げた絵にもある。翻訳論に加えそちらにも着目した研究の代表として、千森の著作『表象のアリス テキストと図像に見る日本とイギリス』が挙げられる。千森はキャロルの伝記・翻訳分析に終始せず、日本に『不思議の国』が紹介された明治期から（1899～1933）の多くの翻訳において、挿絵にも目を向けている。千森は文と絵両方に表されたアリスの姿を通して、ヴィクトリア朝イギリスの文化が明治～昭和の日本でどう受容され、交流・融合していったかを解釈している。千森によれば明治期の翻訳『不思議の国』からはキャロルが少女に示したような共感が失われ、当時の日本で目指された女性像を育成できるような教訓的要素が盛り込まれた。それが大正期にはより子どもの心に沿う内容と変化する。そして昭和初期まで、民主的な時代になるとアリス翻訳作品は輩出・流行し、政治文化的に暗い時代になると減退してきた。どの時代の翻訳にも課題はあるが、『不思議の国』の翻訳と挿絵が日本の児童文化の発展に果たした役割は大きい、と千森は述べる。

また、坂井妙子は『アリスの服が着たい ヴィクトリア朝児童文学と子供服の誕生』の中で、テニエルの描いたアリスの衣装について分析を試みている。坂井によればテニエルは、キャロルが抱いていた中世風の衣装を纏うアリスのイメージとは多少異なるアリスを描くこともしている。しかしそれによってアリスという少女は、当時想定されたヴィクトリア朝の読者層により近い姿となった。坂井は「テニエルは、キャロルが『地下の国のアリス』で表した生々しいアリスのイメージを洗練させ、ミドルクラスの読者に受け入れやすいアリス像を提供した。彼はアリスをミドルクラスの普通の少女として扱ったのである」（坂井, 2007, p.53）と述べる。

そして『不思議の国』は研究だけでなく作品そのものも、未だに新たな翻訳者による新訳や、挿絵のみが差し替えられたり、装丁を変えたりして出版され続けている。にもかかわらず特に翻訳に関する先行研究の多くは、明治～昭和初期の翻訳を分析対象の中心として扱っている。また 2000 年以降の翻訳を分析対象として含んでいる研究では、やはり言葉遊び等の翻訳が難しくバリエーションに富む部分に着目したものが多く、抄訳は重視されない傾向にある。挿絵に注目した研究も少ないため、先述した千森や坂井の分

¹ 川端有子, 2013『児童文学の教科書』玉川大学出版部、白井澄子・笹田裕子編著, 2013『英米児童文化 55 のキーワード』ミネルヴァ書房 参照。

析は貴重である。しかし両者も、現代日本と呼べる時代の『不思議の国』の挿絵には言及しておらず、また日本のサブカルチャー等と関連したアリスの「かわいらしさ」への言及は避けられている。

よって本論文では『不思議の国』という作品の子ども向けであるという特徴を重視しつつ、作品の挿絵に着目しながら論を進めたい。まず、現代の子どもたちが触れることのできる抄訳・絵本などを含む『不思議の国』書籍とその出版傾向を概観する。その中で現代日本の『不思議の国』に特徴的な挿絵の要素を、特に「かわいらしさ」に着目しながら分析し、それがどのような役割を果たしているのか、そしてアリスはどのような存在として描かれているのか検討する。

2 『不思議の国のアリス』と現代日本の「かわいらしさ」

2.1 『不思議の国のアリス』と挿絵

挿絵に着目する前提として、この作品の特徴と概要に触れておく必要がある。『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*)は、ルイス・キャロル(Lewis Carroll)、本名チャールズ・ラトウィッジ・ドッドソン(Charles Lutwidge Dodgson 1832-1898)によって1865年にイギリスで出版された。この作品を語る上で、言葉遊びや洒落の数々を無視することはできない。これらは、作品の出版されたヴィクトリア時代のイギリスに生きる子どもなら知らない者のいない詩のパロディや風刺を多く含んでおり、このことが『不思議の国』を大きく特徴づけるとともに、児童文学の歴史の中でこの作品を不動の地位に押し上げた。日本で著名なキャロル研究家のひとりである高橋は、「『アリス』の最も明白な特徴は、宗教的・道徳的・知識伝達的な教訓性が絶無であることだろう。すべては童心の特権たる無償の幻想と驚異にゆだねられている」(高橋, 1977, p.80)と評価している。

『不思議の国』出版当時、挿絵は現在でも有名なジョン・テニエル(John Tenniel)によって描かれた(図1²)。キャロルは自作品の挿絵にもこだわっており、挿絵画家テニエルと時に衝突しつつ共同でこの作品を作り上げたことは周知の事実である³。アリスのイメージとして現代でも定着している、ウェーブの長髪にフリルのエプロンつきドレス、縞のタイツにフラットな靴という出で立ち、またチョッキを着て懐中時計を携えた白ウサギなどの登場人物の姿は、作家と画家の共同作業によって成立した⁴。こうしたテニエルとキャロルの努力により、『不思議の国』は当時の子どもたちに人気を博した。千森が「キャロルからの抑圧的な要請や葛藤にもかかわらず、テニエルの『アリス』挿絵は大いなる成功をおさめた。テニエルのイラストとキャロルのテキストは、それ以降の幾世代にもわたるわたしたち読者にとって、すでにわがちがたく結びつき、批判の余地がないほどに一体化してしまったのである」(千森, 2015, p.106)と述べる通り、その人気は作品の著作権が切れた1907年10月以降も、現在まで連続と続いている。しかしその一方で、『不思議の国』はアーサー・ラッカムを始めとする数多くの画家やイラストレーターによって何度も描かれてきた。そして日本に渡ってからも、あらゆる人物が挿絵をつけている現状がある。



図1 テニエルのアリス

2.2 アリスと日本の「かわいい」文化

ところで現代の日本においてアリスという少女は「かわいい」という言葉を体現する存在としても知られており、時にオタクやサブカルチャーといった言葉とも関連付けられる。たとえば千森は現代における「かわいい」アリスについても、このように言及している。

² キャロル, ルイス, 安井泉訳注, 2017『対訳・注解 不思議の国のアリス』研究社, p.146 参照。

³ 千森幹子, 2015『表象のアリス テキストと図像に見る日本とイギリス』法政大学出版局 参照。

⁴ 坂井妙子, 2007『アリスの服が着たい——ヴィクトリア朝児童文学と子供服の誕生』勁草書房 参照。

現代の日本では『アリス』を愛好するのは、子どもだけではなく、圧倒的に少女、あるいは若い女性である。むろん、『アリス』の読者を年齢で区別することは難しいだろう。(中略)

日本でアリスがとくに人気があるのは、この女の子らしいかわいさを過度に尊重し愛好する日本人気質にある。「かわいい」という言葉で表象される日本のサブカルチャーの流行の兆しの一つともなった「アリスブーム」を分析するのはあまり容易なことではない。(千森, 2015, p.386)

また、SF&ファンタジー評論家である小谷真理も、「オタク・ルーツの求道者でなくとも、ヴィクトリアン朝のサブカル創造者たちが現代日本のオタク文化との共通項を多く持っている点については、異論はないだろう」(小谷, 2015, p.62)と述べ、一例としてルイス・キャロルの名を挙げている。千森の言うところの「『かわいい』という言葉で表象される日本のサブカルチャー」と小谷の「現代日本のオタク文化」が類似したものとするならば、アリス及びその作者であるルイス・キャロルは、日本のサブカルチャー・オタク文化に影響を与えている存在であると言えるだろう。

とはいえ、先の引用でも用いられている「かわいい」という言葉には多くの要素が含まれている。したがって一言で表すのは難しいが、四方田犬彦は著書『「かわいい」論』において、様々な視点から「かわいい」という言葉に含まれる要素や属性を明らかにしている。その中でも大きいものは「小ささ」「懐かしさ」「子どもっぽさ」であり、これに関して四方田はスーザン・スチュアートの『憧憬論』を参照しながら、「我々の消費社会を形成しているのは、ノスタルジア、スーヴニール、ミニチュアチュールという三位一体である。「かわいさ」とは、こうした三点を連結させ、その地政学に入りきれない美学的雑音を排除するために、社会が戦略的に用いることになる美学である」(四方田, 2006, p.120)と解釈している。ここで言う「ノスタルジア」は「懐かしさ」に、「ミニチュアチュール」は「小ささ」に対応するものであり、「スーヴニール」はノスタルジアを物質化した、往々にして小さな、デフォルメされた品々のことである。「かわいい」という言葉をこのように捉えると、「小ささ」や「懐かしさ」をスーヴニールによって感じる上で視覚は必要不可欠である。つまり日本において「かわいい」という言葉で飾られるようになったアリスから、本に描かれた挿絵の姿という視覚的な要素を排除することはできないであろう。

では、日本のサブカルチャー・オタク文化と関連した「かわいい」アリスの挿絵とは、どのようなものだろうか。日本のサブカルチャー・オタク文化における「かわいい」と関連付けて四方田は「萌え」という概念にも言及しているが、この「萌え」という言葉を含む「萌え絵」というジャンルのイラストについて、田川隆博は「10代前半から半ばくらいを連想させる少女の絵であるが、目が顔の面積の半分くらいを占め、口が小さく、顔の輪郭が丸い。どの絵も非常に共通性が高く、メガネ、ねこ耳、メイド服などがキャラクターに応じて付け加えられる」(田川, 2009, p.76)と定義を試みている。『不思議の国』という一定の物語の中に描かれたアリスにはメガネやねこ耳といった要素は加えにくいだろうが、テニエルが描いたときからアリスが身に纏っているエプロンは元来の汚れを防ぐという目的ではメイド服と似通ったところもあり、この定義におおよそ該当するアニメ・漫画的な挿絵が「かわいい」アリスとして定着していると考えられる。

2.3 日本における『不思議の国のアリス』翻訳と出版事情

現代における「かわいい」アリスの出現に至るまで、日本では多くの人物がこの作品の翻訳に挑戦してきた。日本に『不思議の国』が初めて翻訳・紹介されたのは、『図説 児童文学翻訳大事典』によれば明治41年2月から雑誌『少女の友』に連載された、永代静雄訳の「黄金の鍵」である⁵。この作品は、大人である翻訳者をも楽しませる特別な魅力を持っているようである。『不思議の国』の数多くの翻訳者の一人である楠本は、「子供にとっては、主人公アリスがウサギの穴に飛び込んでそこで体験する冒険が、物

⁵ 児童文学翻訳大事典編集委員会編集, 2007『図説 児童文学翻訳大事典』大空社「キャロル編」p.219 参照。

語としてとにかくおもしろいのだ。大人にとっては、その奇想天外な物語を語る語りに含まれる言葉遊び、鋭い風刺、ナンセンスの仮面をかぶったキャロル一流の論理の展開がたまらない魅力になっている」（楠本, 2001, p.3）と述べる。しかし、英語の独特な表現で書かれる駄洒落などを他の言語に完全に移し替えることは実質不可能である。また、ヴィクトリア朝イギリスという時代背景や子どもの中で流行っていた物事が既に日常として捉えられない現在では、キャロルの風刺や批判を正しく受け止めることはできない。しかしだからこそ、物語としてのおもしろさを伝えたいという思いだけでなく、言葉遊びや英国文化とそのパロディをなんとか日本語化したいという、楠本の述べるところの「不可能に挑戦」（楠本, 2001, p.9）する精神が生まれ、多くの翻訳作品が出版されることになったのであろう。

そのような背景をもつ『不思議の国』の日本における出版事情は多様化を極めているのが現状である。このことに関して楠本は、「二つの『アリス』が子供の読み物として日本に定着したのは、子供がおもしろいと思わない部分をはぶいたものから、『アリス』のストーリーを骨格だけで保っている絵本に至るまでのさまざまな「抄訳本」が繰り返して作られ普及していったからである。もちろん今もそれは変わっていない」（楠本, 2001, pp.5-6）と述べる。このように、楠本の言うところの「ふたつの『アリス』」、すなわち『不思議の国』と『鏡の国のアリス』が日本で普及していった過程でおびただしい数の翻案・抄訳・絵本などが作られたこと、またそのことこそが『不思議の国』を日本でも有名な作品にしていったということはどの研究者も指摘しており、それは2018年現在まで続いている現象である。

3 『不思議の国のアリス』出版傾向と挿絵の分析

3.1 分析対象の選定と研究方法

先述したとおり、『不思議の国』のようにキャロルという作者の存在する創作であるにもかかわらず、日本に紹介された直後から今に至るまでにありとあらゆる翻訳が出されている作品において、いつの出版物から「現代日本」に出版されたと定義するのは難しい。そこでここでは平成の30年間（1989年1月～2018年12月18日現在）に期間を絞り、この期間でどのような『不思議の国』書籍が出版されていたのかを調査・分析した。

この30年間で『不思議の国のアリス』やそれに準ずる題名で世に出た作品は100冊を超えるが、その中には物語や挿絵を楽しむことを目的としないものも含まれる。これらは原作者の『不思議の国』執筆意図から外れるため、本研究の分析対象からは除外することとした。そのうえで国立国会図書館オンラインを用いて検索を行い、国立国会図書館及び国立国会図書館国際子ども図書館にて2018年12月現在閲覧が可能であった、計87冊を分析対象として選出した。選出の基準となった条件は、大きくは以下の二つである。

① *Alice's Adventures in Wonderland* を原作としているもの。

日本においては『不思議の国』の前身『地下の国のアリス』なども『不思議の国のアリス』という題名で出版されることがある。しかしこの作品はキャロルの執筆意図も内容も異なる。今回は内容から判断し、題名が『不思議の国』であっても『地下の国のアリス』を基に訳されていると判断できるものは除外した。

② 原作者・原案者としてルイス・キャロルの名を記しているもの。

『不思議の国のアリス』の名を冠する書籍には、ディズニー映画関連作品も含まれる。しかし今回は児童文学としての『不思議の国』を分析するため、こちらも除外することとした。ディズニー映画関連書籍は原作者がウォルト・ディズニーとなっているため、この条件によって除外することができる。

その他の留意事項としては、平成元年より前に出版されている翻訳者の作品でも、新装版・改訂版・文庫版等として形を変え、平成元年以降に新たに出版されているものは1作品として数えた。一般的な書店・図書館等にて入手することが困難な作品は除いた。

挿絵に関する分析方法としては、先行研究でも述べた千森や坂井の研究を主なモデルとした。児童文学における表象論・図像研究の手法を参考に、分析対象とした書籍の表紙や挿絵に描かれたアリスの姿をテ

ニエルの描いた最初のアリスと比較し類似点や相違点に着目しながら、分類と解釈を行った。

本章および次章では、現代日本における『不思議の国』の出版傾向を、複数の視点から分析する。分析対象となるのは、前に述べた基準によって選出された、1989年～2018年に世に出た計87作品である。

まず本章では87作品を対象年齢層別に分類し、「子ども向け」と判断できるもののみの年別出版作品数も確認する。それを踏まえて次章では、「かわいい」絵柄のアリスや「女の子」向け、あるいは「プリンセスの物語」などと題された子ども向け「作品集」に収められている『不思議の国』の出版傾向についても分析を行う。そののち、そこに見られたアリスの姿を具体的に検討しながら、アリスが現代日本の読者である子どもたちにとってどのような存在として現れているかを解釈する。

3.2 対象年齢について

表1には、全87冊の『不思議の国』を対象年齢別に分類した作品数を示した。対象年齢区分の「子ども」とは幼児・小学生（キャロルが『不思議の国』執筆当初、読者として想定した年齢層）、「大人」とは中学生・高校生・一般（キャロルが読者として想定していなかった年齢層）を指す。この対象年齢区分については、作品に表示のある場合はそれに準じ、表記のない場合はインターネット上で展開されているハイブリッド型総合書店hontoにおける、それぞれの本の利用対象年齢の表記を参照し分類した。hontoにも記載のない場合は、類似した作品や内容を参考に分類を行った⁶。

表1 『不思議の国のアリス』
対象年齢別作品数

対象年齢区分	作品数（冊）
子ども向け	61
大人向け	26
計	87

『不思議の国』が本来子ども向け、それも10歳前後の子どもを対象とした作品であることは、この作品の成立の経緯を考えれば明らかである。しかし日本においては、『不思議の国』は必ずしも子どもだけの作品ではないということが、この数字からは伺える。

3.3 子ども向け作品に着目して

図2では、表1で子ども向けとして分類した61作品のみの年別出版作品数を抜粋し、グラフ化した。2010年以降、毎年新たな子ども向け『不思議の国』が出版されているとわかる。加えて1989年から2008年までの約20年間における出版冊数が25冊であったのに比べ、2010年以降の約10年での出版冊数は36冊である。2010年以降明らかに出版冊数がそれ以前に比べ増えていることから、2010年以降を、より狭義の現代と捉えることができるだろう。

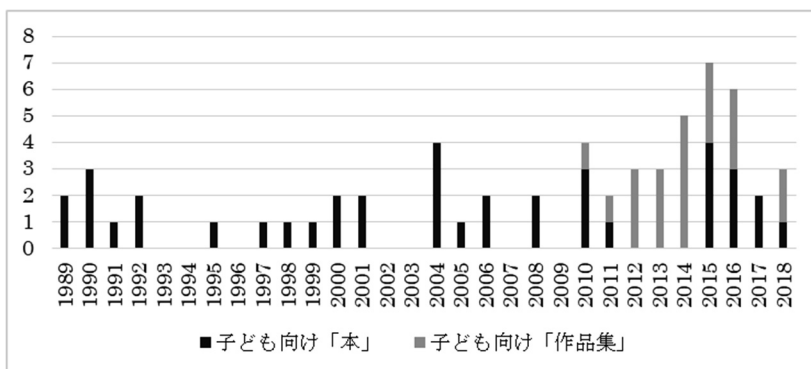


図2 『不思議の国』出版作品数（子ども向けのみ）（冊）

ここで特筆すべきは、2010年の登場以

後ほぼ毎年出版されている、子ども向け「作品集」の存在である。子ども向け「作品集」とは『不思議の国』のような創作、昔話、伝記など多ジャンルのお話を短くまとめ、10話以上を一冊に集めた本を指す。図2からは、2012年～2014年に至っては子ども向けの「本」（一冊の本が全て『不思議の国』か、全部で10話に満たない話を集め一冊としたもの）は1冊も出版されていないにもかかわらず、「作品集」は複数出版されていることもわかる。

⁶ ハイブリッド型総合書店 honto <https://honto.jp/> 2018年12月13日閲覧。

4 「かわいい」アリスの挿絵分析

前述の通り、ワンピースにエプロン姿、長い髪にフラットな靴といったアリスの服装や姿を読者へと強烈に印象付けたのは、初めに挿絵を手掛けたテニエルである。それでもアリスは、古今東西の様々な画家、漫画家、イラストレーターなどによって新たに描かれてきた。今回分析対象とした87冊にもテニエル以外の絵を用いたものは多く、アリスの姿は細かいところにまで着目すれば実に千差万別である。その中で、

表2 『アリス』絵柄別作品数

対象年齢区分	作品数 (冊)		
	「かわいい」	その他	計
子ども向け (幼児・小学生・中学生)	21	40	61
	「かわいい」	その他	計
大人向け (高校生・一般)	2	24	26
	計	64	87

先述した日本のサブカルチャー・オタク文化とも関連すると判断できる「かわいい」絵柄のアリスが現れている作品のみの冊数を示したのが、表2である。なお、「かわいい」アリスの選出に際しては、先に引用した田川の「10代前半から半ばくらいを連想させる少女の絵であるが、目が顔の面積の半分くらいを占め、口が小さく、顔の輪郭が丸い。どの絵も非常に共通性が高く、」（田川, 2009, p.76）という部分を基にした。

「かわいい」絵柄は子ども向けに多い。「かわいい」絵柄の方が子どもにはとつきやすいと考えられているからであろう。絵柄の「かわいさ」が、子どもたちに本を手にとらせる、あるいは「作品集」であればそのページを開かせ、物語を読ませるために用いられていると推測できる。

「かわいい」の定義に当てはまるアリスはどれも、現代日本のサブカルチャー・オタク文化における「萌え絵」とも通ずる絵柄である。安斎昌幸によれば萌え絵は「時代によって変化し、常にブラッシュアップされている」（安斎, 2012, p.59）ものであるし、また『不思議の国』は漫画やアニメではなくもともと児童文学であるため、全ての作品が田川の定義に完全に当てはまるわけではない。しかし大きな瞳や丸い顔、デフォルメされた頭身、現実には滅多にいない程度の明るい金髪だったり、テニエルの衣装を基にしつつも明らかにフリルやレース、ヘアバンドやリボン、宝石といった装飾の多い衣装だったり、現代日本のサブカルチャー・オタク文化的「かわいらしさ」をもつアリスは、特に子ども向けの作品においては全体の3分の1以上を占めている。

「かわいい」アリスは皆、テニエルがアリスに着せた衣装から極端にかけ離れた服装をしているわけではない。長髪でワンピースにエプロン、タイツにフラットな靴という出で立ちそのものは変わっていないが、先に挙げたような装飾的なものが追加される形で変化しているのである。そしてその結果、現代日本のアリスたちは「かわいく」なっている。つまり、この

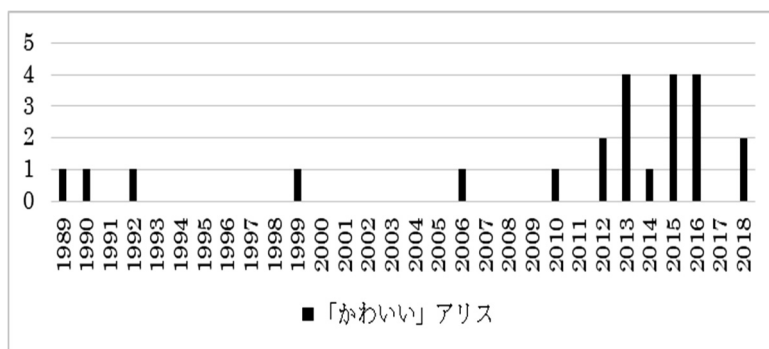


図3 「かわいい」絵柄の作品出版数 (冊)

のテニエルのアリスから追加された諸々のものこそ、現代日本のアリスを「かわいく」している要因のひとつであると考えられる。また、時に原作よりもはるかに短いスカートを身に纏うこの「かわいい」アリスたちは、装飾が増加しているためか、テニエルのアリスと比較して決して動きやすい服装をしているとは言えない。

続いて図3では、元来子ども向けである『不思議の国』作品群の中でも特に「かわいい」絵柄の23作品だけの出版数を、出版年別にグラフにした。

また図4は、『不思議の国』をお姫さまの出てくる話と同列に扱い、「プリンセス (お姫さま) の物語」、

「女の子・プリンセスのための物語」としてまとめている「作品集」（海外の話としては「しらゆきひめ」や「シンデレラ」など、日本の話としては「うりこひめ」「かぐやひめ」などといったお姫さまを中心に据えた話をまとめた作品集。昔話が多いが、場合によっては『不思議の国』のような創作が含まれる）の年別出版数である。

図3と図4を比較すると、「かわいい」絵柄のアリスの増加と、「女の子・プリンセス」向けの童話集の中の『不思議の国』の出現は、やはり2010年頃からと時を同じくしていることがわかる。

原作のアリスはあくまでも一般の女の子として表現されており、プリンセスと呼ばれるような王族の血を引く存在ではない。日本語に訳されたところでその立ち位置は変わらないはずだが、昨今の日本では、アリスを「プリンセス」の枠に入れ、

他の昔話に登場する王族の女の子たちと同列に並べた出版物が出現しているのである。

アリスの服装の装飾が増えることが、アリスの「かわいらしさ」を増す要因のひとつであると先述した。しかし現代日本の読者が「かわいく」描かれたアリスの如き装飾の多い衣服を身に纏うことはあまりないだろう。

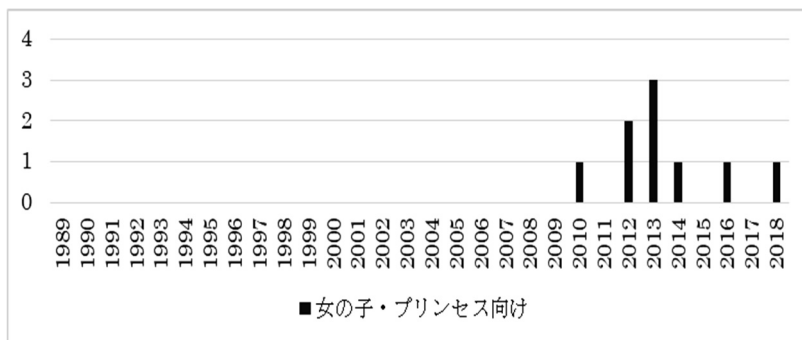


図4 「女の子・プリンセス」向けの作品集出版数（冊）

テニエルのアリスは、坂井も「アリスの服装がいかにか实用的であるか」（坂井, 2007, p.47）と述べる通り、当時の子ども服としては活動しやすい格好である。しかし現代日本ではその姿でさえさほど動きやすいと言えないのだから、「かわいい」アリスの衣装は尚更、着飾った非日常の衣装と言える。

先述したとおり、坂井によれば、テニエルはアリスを当時のミドルクラスの普通の少女として描いている。しかしアリス以外の登場人物に関してはそうではなく、より古い時代の衣装を着ている。この指摘に関連して坂井は、以下のように解釈している。

脇役たちの服装は、アリスが異次元に迷い込んでしまったことを際立たせている。というのは、アリスだけが一貫して一九世紀半ばのミドルクラスの服装をしているからである。他の登場人物が異時代の服装をしている中で唯一、彼女のヴィクトリア朝中期の保守的なミドルクラスの服装は、一九世紀イギリス社会の秩序をファンタジーの国に持ち込もうとし、うまくいかずに孤立してしまう状況を映し出しているようだ。また、アリスの平凡だが常識的な服装は、風変りなファンタジーの国で「まとも」なのは彼女だけという設定とも一致している。（坂井, 2007, pp.52-53）

つまり、アリスは他の登場人物に比べて読者層の「現代」に近い服装をしており、そのことが不思議の国の中でのアリスの異質さや、孤立した状況を引き立たせる役割を果たしていると言える。また坂井によればアリスの服装だけは、作者の生前にも常に「現代」に近くなるようアップデートされていた。原作及び1886年に上演された『不思議の国』などを基に作られたオペレッタについて坂井は「原作では、彼女だけが常に一八六〇年代半ばの保守的なミドルクラスの服装をしていた。そうすることで、読者と同時代人であること、彼女が異次元に迷い込んでしまったことを示していたが、八〇年代のドレスを纏ったオペレッタの中のアリスも同様の効果を発揮しただろう」（坂井, 2007, p.58）と述べる。アリスは時代に応じて服装を少しずつ変化させることで、その時代の子どもたちに寄り添ってきたと言える。

先の千森の研究では、日本に紹介された初期のアリスには当時の日本が女子に求める要素が盛り込まれていたことが明らかになっていたが、アリスは本国イギリスにおいても、常に読者の「現代」を映す鏡の

ような存在だったと言えるだろう。アリスは服装をアップデートさせることで、当時の現実に生きる少女に常に寄り添っていたのである。

その一方で、日本では「かわいらしさ」が優先され、先に述べたような形でのアップデートはなされていない。つまりアリスが「かわいらしさ」を前面に押し出す衣装を纏うことは、読者がアリスという少女から切り離されることと同義である。その、「読者と切り離された」非日常の環境を思わせる衣装を物語の中で終始着ているアリスだからこそ、現代日本では「プリンセス」と呼ばれてもおかしくないのだろう。過剰なほどにかわいらしく着飾り、動きづらいとさえ思える衣装で不思議の国を彷徨ってみせるアリスは、読者の日常とはかけ離れた世界を日常とする存在であると解釈するのが自然である。現代日本の子どもにとって「かわいい」アリスは、読者に寄り添う存在ではなく、読者は到底辿り着けない世界に住む、遠く切り離された存在と言えるのだ。

5 考察、今後の課題

2010年以降増加している現代日本の『不思議の国』におけるアリスは、衣装についてはテニエルの描いたアリスの衣装を基にしてそこに装飾を増やしたものであり、身体は現実にはあり得ない頭身や顔つきになることで、現代日本のサブカルチャー・オタク文化的な「かわいらしさ」を体現しているということがわかった。

最初にテニエルによって描かれたアリスの衣装は、イギリスにおける『不思議の国』出版当時のミドルクラスの子どもたちと同代人であることをアピールするものとして機能していた。さらに、時代が下ると衣装もアップデートされ、その結果アリスは常に読者に近い存在として生き続けた。また千森の研究からは、明治時代に日本に紹介された『不思議の国』は日本語に翻訳され、新たな挿絵をつけられる過程で、当時の日本の女子に対する世間の風潮や考え方を色濃く反映していたことも明らかとなっている。

しかし現代日本の子どもたちは必ずしも、自分の日常と同じような服装で冒険するアリスを見ることが出来るわけではない。アリスの纏う服は、イギリス・ヴィクトリア朝のテニエルが最初にアリスに着せた衣装を基に装飾を（場合によっては過剰に）加えたものであり、現代では機能性に欠ける。洋服すら必ずしも少女の日常着とは言えない明治時代こそ今は昔ではあるが、現代においても日本の子どもたちがこれらの「かわいい」アリスたちほど装飾が施された衣装を着る（そして、その服を着た状態で泳いだり、森を歩いたり、赤ん坊を抱っこしたり、スポーツをしたりする）機会はまずないだろう。「かわいい」アリスの衣装は、現代日本の子どもたち向けにはアップデートされていないのである。「かわいい」アリスは、現代日本の子どもたちの日常からはるかにかけ離れた衣装を着ることとなった。「かわいい」アリスは衣装によって「かわいらしさ」を手に入れる代わりに、出版当初のアリスに備わっていた「読者との同時性・同場所性」を失ってしまったのである。

さらに、アリスがプリンセスとして扱われる現象も、「読者との同時性・同場所性」の喪失を引き起こしていると言える。アリスの服に機能性があつた頃、アリスはプリンセスではなく、ヴィクトリア朝イギリスに生きるミドルクラスの一少女だった。また日本に初めて紹介された頃、アリスは時には黒髪になり、また着物を着て、明治日本のあるべき女子を体現していた。しかし現代日本においてアリスは読者である子どもたちのもとを離れ、『不思議の国』は知らないどこかのプリンセスが体験した冒険物語のひとつになっている。「かわいらしさ」を手に入れたアリスは子どもたちにとって、他者として存在しているのである。

『不思議の国』が出版された当初、アリスはその時代の子どもたちと「同じ」であることで人気を博した。しかし現代の日本において、アリスという女の子に求められているのは第一に「かわいらしさ」であり、今や、アリスと読者が「同じ」であることはあまり必要とされていない。アップデートされることのない非日常的な衣装を纏った「かわいい」アリスは、場合によっては「プリンセス」として、子どもたち

から遠く離れた世界での出来事を、子どもたちに代わり体験する役割を果たしていると考えられる。

本論は、現代日本のサブカルチャー・オタク文化的な「かわいい」イラストの是非を問うものではない。しかし昨今、いわゆる「萌え絵」に分類されるような挿絵の付いた作品を子どもに与えるべきか否かについてインターネット上で議論されるなど、児童文学は内容だけでなく、挿絵にも注目が高まっている。日本で大きく花開いた漫画やアニメ文化から来るであろう「萌え絵」的な絵が作品に与える影響や子どもたちが受ける印象などについては、今後も検討を重ねたい。

参考文献

- Carpenter, Humphrey, Prichard, Mari, 1984, *The Oxford Companion to Children's Literature*, Oxford: Oxford University Press. (神宮輝夫監訳, 1999, 『オックスフォード世界児童文学百科』原書房.)
- Carroll, Lewis, 1897, *Alice's Adventures in Wonderland*, London: Macmillan and Co. Limited. (安井泉訳注, 2017, 『対訳・注解 不思議の国のアリス』研究社.)
- 安斎昌幸, 2012 「ぼくの萌える仕事」, 『映像情報メディア学会誌』, vol.66, pp.57-60.
- 川端有子, 2013 『児童文学の教科書』玉川大学出版部.
- 楠本君恵, 2001 『翻訳の国の「アリス」——ルイス・キャロル翻訳史・翻訳論——』未知谷.
- 小谷真理, 2015 「キャロル狩り」, 『ユリイカ 2015年3月臨時増刊号 総特集◎150年目の『不思議の国のアリス』』, pp.62-71.
- 児童文学翻訳大事典編集委員会編集, 2007 『図説 児童文学翻訳大事典』大空社.
- 白井澄子・笹田裕子編著, 2013 『英米児童文化 55のキーワード』ミネルヴァ書房.
- 坂井妙子, 2007 『アリスの服が着たい——ヴィクトリア朝児童文学と子供服の誕生』勁草書房.
- 児童文学翻訳大事典編集委員会編集, 2007 『図説 児童文学翻訳大事典』大空社.
- 高橋康也, 1977 『ノンセンス大全』晶文社.
- 田川隆博, 2009 「オタク分析の方向性」, 『名古屋文理大学紀要』, vol.9, pp.73-80.
- 千森幹子, 2015 『表象のアリス テキストと図像に見る日本とイギリス』法政大学出版局.
- 四方田犬彦, 2006 『「かわいい」論』ちくま書房.